

令和5年度 第3回岡山県健康の森学園支援学校運営協議会 記録議事録

令和6年2月5日 10:00～11:50 会議研修室

進行:上野副校長

記録:杉山

参加22名:運営委員13名出席(長谷川委員1名欠席)、学校職員9名出席

1 開会

○岡本会長挨拶

今年度最後の運営協議会になりましたが、前半は学校からの報告、後半はディスカッションを行い、忌憚のないご意見をお聞かせください。

○定久校長挨拶

今年度の活動のまとめを行い、来年度に向けて教育活動がさらに充実していくための、アイデアをいただけたらと思います。

2 議 事

「今年度の取組状況と次年度への課題について」学校より説明及び報告

(1) 令和5年度学校自己評価について(定久校長) ※別紙 資料 p11～12

保護者アンケートについては、すべての項目で肯定的な意見が90%以上の評価していただいた。特に、今年度の学校経営計画に関する項目については、肯定的な意見が95%以上を超えている。R4年度肯定的な意見90%以下の項目については、R5年度、学部、寄宿舎の連携、PTA活動の充実、保護者への教育相談、研修の実施等を行うことで上昇することができた。また、教職員のアンケートについて(資料P11)学校経営に関する項目については肯定的な意見が100%だった。ポイントが前年度から低下している項目については、施設の老朽化、教室の不足などのハード面での実態や、コロナ感染症の5類移行により、行事がコロナ禍以前に戻り教職員の負担感が増したためと考えられる。また、教職員の意識の向上により、目標を達成できていないと感じているように思われる。保護者がアップし、教職員がダウンした項目に「児童生徒のプライバシー尊重」が挙げられる。教職員が研修を行い人権意識が高まっている姿を保護者が見られて配慮していると受け止められたのではないかとと思われる。教職員は自らを厳しい目で見ることによって、保護者と教職員との意見のギャップが見られた。

(2) 令和5年度の進路状況について(山崎高等部校務)

令和3年度から令和5年度(予定)の卒業後の進路状況について報告。

(3) 学校経営について(定久校長) ※別紙 資料 p1～9

本校の4つの強み、地域のつながりを柱に教育活動を進めてきた。

成果としては、次のことが挙げられる。

○キャリア発達を促す指導支援の充実

- ・拡大ケース会議の開催→小学部13回、中学部8回、高等部10回
- ・技能検定等を活用した生活力の向上→小学部技能検定を実施
- ・広大な自然環境を生かした活動の開始

○教職員の専門性の向上

- ・研究授業(各学部)、ニーズに応じた研修(寄宿舎)→指導力の向上

- ・授業への ICT の活用

○連携による指導支援の充実

- ・夏休み中 施設訓練班・アンテナショップでの職員研修
- ・学校運営協議会の開催、地域連携室の体制づくり
- ・中学部・高等部での企業等との連携

○情報発信とセンター的機能の発揮

- ・学校説明会を通じての転入学希望者は小・中・高等部合わせて、7名である。(12月現在)
- ・新見市内の小・中学校からのニーズを聞き取り、公開講座の計画・実施した結果新見市内外の特別支援学校以外からの参加者が昨年度より10名増加する。

○働き方改革と同僚性のある職場

- ・衛生委員会で各学部からの意見を吸い上げ検討することができる。
- ・職員提案による同僚性向上のための研修・活動の実施

令和6年度は、児童生徒数を確保するために、魅力ある教育活動を実施することがさらに大切だと考える。4つの強み(広大な自然環境・学校と施設の連携・寄宿舎・少人数指導)、地域との連携、教員の指導力の向上を中心に、児童生徒の成長につなげていきたい。

○質疑応答

(若林委員) 令和5年度 A型事業所の内定がなかったようだが、希望はなかったのか。それとも、受入先として、限られている状況なのか。

(山崎高等部教務) 令和5年度については、A型事業所の希望はなかった。受入先事業所としては、選択肢が増えていると感じる。

(山本委員) 卒業生、保護者とも、卒業後も不安なことがあると思われるが、家庭と学校の連携や手立てを行っているのか。

(山崎高等部教務) 進路決定までに、進路懇談を行い生徒に合った進路先を決定していく。その後、希望の進路先で実習を行うことによって、生徒が卒業後に進路先で就労、生活ができるための力をつけていくようにする。また、移行支援会議で相談員と今後、相談しながら生活できるよう情報を共有していく。卒業後、3年間はアフターケアを行い、サポートできる体制づくりをしている。

(中川委員) 令和5年度の進路先は、生徒、保護者は希望通り決定したのか。

(山崎高等部教務) 卒業生全員、希望の進路先に決定した。高等部1年より、進路懇談等で丁寧に聞き取りや実態を把握することで、希望と大きな隔たりないところに決まっている。少人数できめ細やかに進路指導を行うことで、本人の意識とのギャップが少ないと思われる。

(4) 令和5年度地域協働活動・地域貢献等について

① 事務局からの報告(上野副校長)

地域連携室を新設し、学校のニーズと地域人材をつなげる組織作りができた。また、人材(地域ボランティア)を活用し、授業支援や教育活動への提案をしていただいた。SNS、アンテナショップ等を通じての情報発信も行った。

【成果】地域連携室を核として、学校のニーズと地域人材をつなげるシステムが機能し、教育活動が充実した。また、ネイチャートレイルの整備に向けて、動き始めることができた。

【課題】学校と学園のボランティア活用の整理を行っていく。また、ネイチャートレイルの改善を進め、広大な自然を生かした教育活動を安全第一で推進していく。

② 小学部からの取組

「地域との協働活動・地域貢献活動」では、学園内の環境整備を整えてくださっている森林組合の方へあさがおの種のプレゼントをお礼のメッセージを添えて手渡したり、校外学習で利用したタクシー会社へお礼の手紙を書いたり、学園のアンテナショップを通じてお世話になっている地域の方々へ手作りカレンダーをプレゼントした。「豊かな自然環境を生かした教育活動」では、図工の授業で色づいた葉や木の実など「秋の素材」を使って作品を作りました。

【成果】自然に触れる心地よさや長い距離を歩くことにより、体力や忍耐力を養うことができた。

【課題】立地的にも新見市内から距離もあることから、児童の移動が難しい。このことにより学びの広がりが抑えられることのないよう、アイデアを出し合っていくことが必要。また、児童の実態や体力等も考慮しながら山歩きのコースやチーム編成を組むなど、次年度に反映させることが重要。

③ 中学部からの取組

「地域との協働活動・地域貢献活動」では、高梁市「はたらくマーケット」において遠隔販売学習をしたり、本学園のアンテナショップ「森のおみせ」で販売学習を行ったりした。また、施設の園生や職員の方にゲストティーチャーとして迎え、学部畑の農作物の植え方や田植え祭りの前に、稲の植え方を教えてもらい、活動した。「豊かな自然環境を生かした教育活動」では、授業の中でネイチャートレイルを歩いたり、美術「自分だけのオリジナル筆で描こう」でススキの穂先や小枝、石、木の葉などを学園内で自分が探し集めた素材を使って筆を作り、作品を作ったりした。また、大豆の栽培では、農産班と協力をして豆の収穫から豆の選別までの一連の流れを通して学習した。

【成果】学園の自然を生かした授業の実施について、次年度も反映できるよう振り返ることができた。

【課題】次年度に向けて活動内容の見直し等を行い、より学園の自然を生かした活動にするため、職員からも活動内容のアイデアを募っていくことも考えたい。

④ 高等部の取組

就労に向けた地域での取り組み、校外実習（年2回）と定期的に地域に出向き作業学習を行っている。高等部で実施している地域での作業学習には、企業内社会体験学習、地域型作業学習、企業内作業学習がある。また、「取組地域貢献活動」として、校外清掃（清掃班） 校外販売（石けん班）、ペットボトルキャップ集め（環境班）を行った。

【成果】地域において実際に働きながら学び、貴重な経験を積むことができています。また、事業所やお客様から喜ばれることにより、「自己効力感」「自己肯定感」が高まっていることが、生徒の成長につながっている。活動を行うことで、地域の方に本校のことを知ってもらえた。

【課題】学習の振り返り方法について、さらに研究していく必要がある。また、実習等の受入先の確保、学校が地域に貢献できることの洗い出し、「地域」の捉え方を考えていきたい。

⑤ 寄宿舍からの取組

寄宿舍フェスタで、舎生が企画し活動が行えた。また、自由時間に、散歩したり、遊具で遊んだりして体力づくりを自然の中で行うことができた。

【成果】自然の中で活動の幅を広げていくことができた。避難訓練等、どのような場面でも（夜間、学校の教育活動以外）落ち着いて行動することができた。

【課題】さらに活動の幅（場所、時間等）を広げていくことが課題である。

「協議及び意見交換」

協議テーマ『魅力ある教育活動のための、仕掛けアイデア』

テーマについて3グループに分かれて、協議及び意見交換を行う。

【A グループ】

(若林委員) ネイチャートレイルの整備が進みよかった。今後も、要望はしっかり発信していくこと重要。

(佐藤事務部長) 整備の進捗状況について説明する。保安林のため、木が腐っていないと伐採できない。

(千種委員) ネイチャートレイルの整備ができれば、開通式などを行って地域の方に知ってもらうことができればいい。健森の自然を生かしたすずらん、アテツマンサク、バードウォッチングなどの自然観賞会など学園、地域が一緒になってできる行事ができればいい。

(吉岡委員) 保護者として7年になるが、ネイチャートレイルを初めて歩き、知らないことがたくさんあった。参観日等で保護者の皆さんに知ってもらう機会がもてたらいい。

(赤木委員) 安全、安心ということも大切であるが、自然の中で危険を感じることも必要。ぬれたり、凍ったりした道は滑りやすいから、滑らないように歩くなど。バーベキューなど日常でできない体験とセットにして体験できるといい。

(内田教頭) 木のおもちゃ、楽器バンドーラづくりなど地域の資源を活用した活動ができればよい。

まとめとして、学園、保護者、地域の方を巻き込んで、豊かな自然を生かしたアイデアをたくさん出し合って、新しいことにチャレンジできるといい。

【B グループ】

(中川委員) 新見市内の小中学校の児童生徒数は減少傾向にある。市内小学校の支援学級もなくなる。

(神郷北、本郷など3校) → 健森の強みは、「寄宿舍があること」と「少人数の学び」が提供できること、このポイントをしっかりとアピールしていけばよいのではないかな。合わせて、寄宿舍の建物の老朽化が見られているので、改修を要望してみてもいい。

研修の視点では、新見市教育研修所の研修(年3回)に来て話をしてほしいと思う。特別支援教育免許保有率が、支援学校 90%以上(支援学級 30%)なので、その専門性を生かしてほしい。

(山本委員) 健森の強みは、土地の広さ

生産—加工—販売の一連の流れを主体的に学べるような仕組みを。

- ・ 小・中・高の垣根を取り払って、縦のつながりをもたせることで、高等部がリーダーとして教える体験ができたり、寄宿舍での生活にもよかったりするのでは。
- ・ 販売に携わることで、お金に関する学習ができたり、これらの活動を通して、自己肯定感等の高まりにつながると思う。
- ・ 大切なのは、自立や就労を目指して。そこは教師がしっかりと関わって。

(岡本委員) 健康保育学科の学生は、特別支援学校の授業見学をさせてもらっていて、支援学校の免許を取りたかったり、支援学校の先生になりたいという希望をもったりする学生にとって、貴重な学びの場となっている。今後も継続させてほしい。

また、健森が要望しているボランティアについても、上記の学生を中心に参加させたい。

(定久校長) 大学の教授の方々に、本校の研修での講師を依頼したい。

(中川委員) 子どもを育てるためには、成功体験を積むことが大切。成功体験が自己有用感につながると考えると、小学部技能検定をしっかりと発展させ、評価する機会を増やしていくことを考えるとよいだろう。

(山本委員) 通学距離がネックになっているのなら、いっそのこと全国学区にしてみてもいい？ 児童生徒の減少は、継続的な課題になることが考えられると、先を見越して対策を検討した方がよいと感じる。

【C グループ】

(宮崎委員) 学校が地域に出ていくことも大切。逆に、学園にこのような広大な敷地があるのだから、森を有効活用して、学校に足を運んでもらって、学園の特色を生かした何かを考えるのも良いのでは。例えば、『森の駅』など観光スポットとして魅力作りをして、観光バスを寄り道先になるような工夫ができればいい。東城方面に、観光で抜ける人も多くいるので、その寄り道先になれば。

(大倉教頭) 地域に出ていくにも、交通の便が悪く、タクシー代もかかる。実習として、定期的な回数を組みたいが、予算も削られていて、厳しい状況。

(田中委員) 健康の森利用促進協議会にも入っているので、そちらも活用しつつ。健康の森学園で作ったしいたけ、卵などを販売する。とてもいい物がある、それを生かして。自分たちの敷地近くで販売する。人が動く、集まると、経済効果もあり、園生の雇用につながっていく。お金を自分のところで生み出していくことで、広大な自然の維持にも繋がっていくはず。外の補助金に頼るのも、限界が来るから。学校の予算が削られているのはなぜ？

(上野副校長) それについては正式な理由は分からないが、県の予算は減ってきている。

(宮崎委員) 以前は、宿舎、お店などの大きな構想があった。宮河内から上のエリア。賑やかな構想があった。そのイメージにしていくな。時々アドバルーンでも上げて、客寄せするとか。知名度の上がる手立てを。

(山田施設長) 2 年ほど前にあった、森のフェスタなど、とても良い企画だった。

(宮崎委員) かつては、芸能人を呼んで、野外コンサートなどを行っていた。とても賑やかだった。人を、森に集めるのが良い。

(守谷委員) 学園の敷地(ネイチャートレイル)は、学園の人しか使えないのか？

(山田施設長) 県指定のオリエンテーリングコースにもなっている。地域の人も使える。

(田中委員) 県がお金を出すとしても、学園の子供たちのためだけにお金を出し続けることは難しい。県民全体で活用する方法を探って、県民で活用できることには、予算が出ると思われる。

森林環境贈与税は市で独自に使えるお金。県のお金より使い方に自由度が高い。森林に関する研修なども含め使うことができるはず。森林環境贈与税は、新見市は、県の3分の2くらいおりているはず。1億数千万円があるはず。健森で全部使えなくても、いくらかは使うことができないだろうか。

(山田施設長) アンテナショップが、週2回運営。地域に出た、園生が集まってきている。特に水曜日。

お店にしくなくても、〇〇ステーションとして地域にスポットが作れないか。サロンのような地域生活の困り感などを気軽に相談したり、過ごしたりする場ができないか。その場に、仕事として、高等部も含めた園生も関わっていくことができないか。高等部生は、先輩社会人との交流の場になる。

その後、A グループ(内田教頭)、B グループ(鹿島教頭)、C グループ(大倉教頭)が協議した内容を発表し、情報共有する。

(定久校長) 引き続き、本校をバックアップしていただけるようお力添えをお願い致します。

来年度も、本校学校運営協議会運営委員としてよろしくお願い致します。

3 諸連絡

(上野副校長より) 令和6年度 第1回学校運営協議会 令和6年5月27日(月) 10:00~12:00予定です。

4 閉会挨拶(吉岡副会長)

前向きで、温かいアドバイスをいただき、嬉しく思いました。今後とも学校が元気になっていくためにお力添えください。